

連載：読書のすすめ (第6回)

「アンドレ・ヴェイユ自伝」

(シュプリングァーフェアラーク東京,A. ヴェイユ
著, 稲葉延子訳, 1994. (2004. 増補新版))



この本の副題には「ある数学者の修行時代」とある。ご承知のように、アンドレ・ヴェイユは20世紀最大の数学者の一人である。1906年にパリで生まれ、1998年にプリンストンで亡くなっている。文字通り20世紀を生き抜いた人物である。しかも、彼は世界中で活躍した。

訳者の稲葉延子氏はフランス文学者であり、アンドレの妹で思想家であるシモーヌ・ヴェイユの研究者である。その稲葉氏が直接アンドレ本人から日本語の翻訳権を委ねられ、出版したのが本書である。したがって本書は数学書ではなく、激動の20世紀を生きた一文化人の目から見た生きた20世紀史とも言える作品である。

20世紀初頭のヨーロッパの教育事情、イギリス支配末期のインドの状況、第2次世界大戦の記述では連合国側にいたヴェイユ自身の心理描写が見えて興味深い。勿論、ブルバギの話についても面白おかしく書いてある。晩年はアメリカで生活をしており、南北アメリカについても興味深い記述がある。本書はプリンストン高等研究所を引退する1976年までの自伝であるが、20世紀の世界情勢、世界の教育事情を知ることができる本だと思う。

本書は1994年にA5版の1冊の本として出版された。それが増補新版ではB6変版の上下2冊本となった。更に増補新版では日本数学会の大御所 彌永昌吉(上巻)、佐武一郎(下巻)両氏の随筆が入ったのも嬉しい。是非一読してみてください。

「数学をつくった人びと」

(東京図書, E. T. ベル著, 田中勇, 銀林浩 1997.
文庫版早川書房, 2003.)



今、サラリーマンの間で数学書、数学関連書の愛読者が増えているそうである。昨今の数学ブームが引き金になっているようであるが、知的好奇心を満足させるためには数学的な内容の本を読むことが一番なんだそうである。

本書も1997年にA5版の上下2冊本として出されたときはさほどでもなかったが、文庫本として上中下3冊本として出版されるや爆発的な売れ行きで、名のある大型書店では平積みになっていたのがあっという間に売り切れてしまう盛況であった。したがってこの本を手にした方は多いかもしれない。

本書は数学者列伝といっても良いかもしれない。序論を入れて約30のタイトルが付いている。一タイトル毎に一人ないし数名の数学者のエピソードやその数学の業績が書かれているので、読者は目次を見て、興味を持ったものから順に読んでいけば良いようになっている。各数学者の業績についても書いてあるので、数学の教員としての知的欲求にも充分応えてくれると思う。ただ、縦書きで書かれているため、数式の部分は少々読みづらいという難点はある。しかし、それを差し引いても余りある内容の濃さは読者を充分満足させてくれるに違いない。

本書の原書の初版は1937年というから相当昔のこととなる。しかし、いつ見ても新鮮で本書の中には常に新しい発見がある。後何百年かしたら本書は数学の古典というジャンルに入るのだろうか。

【編集部】